鄙柏子

911.3
ヒ

掌ヲ四時ニ当ル者ハ野人形也檜扇千
州之事ハ枝葉也者ハ二十九之里ニ在ケル舞
也其下ニ咲者ハ九天ヲ浴元卿者三方ヲ誂ヘ
以テ毛識七芒六合八隅ヲ冒シ家ニ有ヲ
寸方ニ家雑子来生用中出当者知白龍波也
山也六之形九者之所以之家ヲ保也是ヲ見ル者ハ之
古今ノ李詞ニ林ヲ集ル者也其家ヲ扱ハル者宿

此日於當社而寄合所　伊勢國宗廟乃
宮様以尊き荘嚴當日神楽也端正難有
在江日鳴也潮、河樽を立て日露ある酒也湖く
漁當河津沖妻に浪瀬也被り打河津事
激來日移也以而也太鼓た彼あ吹重陸漢
國數野丹寸取り如何な標を為く書標丹安儀
國々社隣記也此一為日集始丹帶やよ來に

在理地方也日濱無し哉ら付當と余流より早く
地乃力見拝也敬て丹羅日摩理より也い神を丹也
去比難後妻ら鼓吹海日聚て烏帽子猶松
也し也見社七萬事ツ業よりしさ気みて見神激來漢
太鼓さ国也い生利耳日貴也し古白無きして
社相生見也元伝拝持也吉也生とと
百杉二百見千見万見ぶ去都々也儀もあ事丹事

春宵一刻もあたひ千金の妙地に
遊ぶ繪の世にも浮かれつゝかれなるを見しにと
呼なる揚まの昔しもくさの調とてなるを
彩出かせしも妙の環に佗の唄をかき調子文也
運衆も銭も粗なるも波浦も妻も人も己も熟
よみ唄書も中く阿ほ揚多く此洲も上方取へも
やゝこみ参る事了ならぬ所集くも御摸集常

翌に咲花の粧波相也一年十二の次く色目の
あらゆる同し境にうつりかはりもの人也よりや
調に節くるしみてからみちの揺をまた天地間一種也
此洲にあらずともいはきをかしや節柏子も名つけぬる
とて作者也をかしくも雅趣ならぬも叶ひに於て陳篠
おなしく一首の序とす
天保癸巳春花朝日　大梅山人識

俳諧鄙拍子

春之部

打なひて側へ寄し青柳　一の画　　素檪

去年よりも萬歳添も富代　　孤来

乙鳥は巣をかけ和る春りけ　　月海

分銅のもめぬ春のちからかな　　宗郁

据よし箱樋紙闇ふ萬の月　　宗序

夏よりも蚊の多ひ宿　百　　大梅

風透地板り葡萄のまさきく　米
十ぶらまであらし荏蔬真くら　様
詠ぶれ醉て戻々ゆつくり煉　郎
松の田へ引窓の月輪味　海
大名人扉風紙をかへ條の隠　梅
欠ば氷柱の汁に浸して刻　序
漸裁曲汁る石了ぶら敷く山の月　様
一本檜了るゝ後蔓草　米

閏に居てるまでもまゝよ帰手引　海
呼ぶ種くる風邪をひきて押　郎
飛ぶ都路の花の宿汁の赤るゝ百の竜　序
鳥わたる渡田まもり置り　梅
船の苦参わたる朝に続ておる　米
帰に帰るを仕て出す曼陀羅　様
秋さんけの留る望りの淋しき尼とおり　郎
緒ん宿ゐて直沢数麻　海

二

樵屋へこす偕單笥よより一すぢ刷　梅

寒りる一垂る嵜ひらし　序

番時もちつとも兼務の田舎めき　樸

安以鼻緒の踏さつゐへ茶紀　米

寄合の井直りのと降法し　海

九尺二間よ阿弥陀堂棚　即

月以り淺す液鑑の勝然いて　序

志やうつまちまくれ赤い酒肌　梅

名ヲ
取之壹馬も装ふて大旗ひ　米

家ラ以多日て加賀の御遊び　樸

むつしまきさて屋根の破損の蔵白く　即

浪人當者のひ指ら着板　海

云ふまての長以よう尾嘆き　梅

埃り大のこの岸よ霧む四辻　序

卓郎

一 揚汐磯ちかくに游く　桂一郎

手木一本に川岸のなかしらひ　孝彦

此寿をいひの残盃酒亭て　大梅

のつひきならしになさける剣　素襟

鍔の錆拭添月影乎　孤米

糸見て咲けむ錆のちらく　月海

ウ

雷ほと暑い盛りに霰降り　彦

新茶添井の辻に人出添　郎

むき出すに痩背中こそ來る涼臺　襟

何語木戸中にして鼓笛と富士山やま　梅

孝公の口入なれは小寸添様子　海

伸して全能身持翻又為る　米

なく晴る三月の松のうちくらく　郎

凄也渭に蘆の末枯　彦

帽子纒もつす遶波の梢引て　梅
梅ほしきをく茶しぼめし　様
嵯峨が孤法師気ちふ杖直し　朱
霞立日影ふもる膝頭　海
二
春風ふ花し上げさ鶯の声ぬれ　序
嵩以同士酔おく湯浴ゝ　郎
露ゆゑりと学まつる桂根宿　様
復立報のさしみずつきし　梅

是ゟ下は時雨ヌ電化ゆきて村　海
木隠梦し壁紙炉加す　朱
書庭ぬ先霜ふき門の服　郎
立襠さま哀嘆志ふの浴　序
泥ぞ婦紙何て尻目ヌ見ぬ筆転　梅
癩府さうな相識茶て居る　様
有甲斐ぬ年紀三日月の雲ヌ入　朱
稽書哭る山の肩先　海

名ヲ

うそさむく犬の驚るしく鎌きなき　房

病葉の散まひうきなるくろ　可

悪性の陽にうろひ紙結ひうき　棲

盃流も飲まるゝ人摘　梅

世の雲流きつくの世理の世　海

手紙は合流れ為鶴り　朱

月海

出心のさかもり付こまでも春秋の雷

房蘇の匂ひの耐る　楷鍋　不老

生楷の家早睦月のうきて麻　細来

手入しの漏し樋の口　風五

廿三秋紙榛と柳よ引ッきるみ　春陸

同じ桐青の様まとなちむる　海

ウ

ゆらゆらめ牡果て杭寺椒儀　老

雅しい路のとしゝよりきゝて　朱

伴人我を絶える漂ふ沙汰なき　五

壁切挨拶撥合臺裏　屋

襖丈致つまる浴衣の鞘強く　海

まず落封りつく出囲唯井　老

月の出を相手に家の者かとりて　朱

紫苑なる咲浦の沙佐舟　五

一

秋も陰に取りなかし蛙のすみ雲　屋

今日の芸日のよりまゝにかゝり子　海

指形の白への桜に雲花の室　老

頬髭下まとも當時帰　朱

二

綿入を黄えて極買ふ春殊末　五

一人櫻めに天窓九めむ　屋

事懇忌さりけつく仇とずり　海

湿り道つてなか蛸るゝ蛇小鼓　老

一概な芸業の中の善悪楓　米

備ながら盛ら猫山の静寺刹　五

ためながらや古画図をかひさる羅漢　座

師走業師の弟子人がなす以　海

雁来て書大墨筆の刷毛仕筆　老

脱の金稼ぐならむ猿指　米

さす月のとれときに畑稼て　五

行きから紀後の雛棚　座

名ウ

木庫のゐるはなるやら巾きもてあら　海

菜みんなる風を引き畑囲心　老

商人の猪てゐる暖やかみんと出頭　米

ひ堂と告まへ阿ゐる助以　五

さゐ猪藤ふ雛之恋の鉢なまきた　座

禄よくかけて杖る菜苗　海

發句春之部

初春

元日や針指ふゆる椽の芸紀　大梅

掃初や礼者来かゝる堤り先　日人

元日ともや賣物の急直一の那　謝生

我春を不二と眺波我在たり　鈴来

山里や去年ま年ゝ年の春　若谷

めつらしや春立宵の小提灯　椋生

門松や潤る男が拂ひ　苡舟

梅若菜阿るゝよまの曙ひかり　禾木

鍬ちしめ梅の下道ゆかりかり　江月

若菜哉汐浮阿つひや山の家　卓郎

若菜のゆくありて這入鍬一の那　月蘇

着飾れふてつ筆あつ羽子の友　一貞

羽子つくや猫もちやらつく向　蘭溪

羽子つくや椽うち直すよ上草履　寿庭

韵一鉄て根もゝ摘若菜哉　月海

ちやゝまゝて摘もして若菜哉　翠兄

七くさや捨まほ常も眼に立ぬ　凰五

摘と数書障まて知らす仏の陸　蒲鳥

張出しに若菜もかりの八百屋哉　一大

うかくしら高に見ゆる嫁菜哉　斗圓

七草哉跳る叩く菴の那　月海

山風のゆるも子の鞍蹴ち出の那　賃僕

ふ谷ちらとも井の水ちらちらと春の時雨　丁知

山根へやふまれし麦の二番肩　孫山

窓時戸を宵月めくや咲きかし　田美

正月や天神さま時花ちらの釣　少女 久米

梅

梅うゑて詠も残りし如　接木市　雨郁

宴もけ出て抱へて立や鉢の梅　研山

梅柳遥以平叶の少しふ形　一蕉

何時梅さへ咲きちら形容華　少女 玉世

咲所では静かし詠し梅の花　駄鳥

南風程をよけて取くや梅の花　在茲

腰の立日はなくなり如梅の花　馬抱

不時花は咲かりすまし来り梅の花　幻芝

見てて出てし家のうちもらすあのまれ　小郁

数の梅力味一すらし流　蔦の邦　三字

梅の根も斬部するや梅の花　相栽

水の出ぬ井戸に清しや梅が香　味流

汲まば汲めやら梅の匂ひ風　風五

粗枝をけづりけりや梅の花　四菴

老ひ木の志るしに梅さへ咲きにけり　不老

閑窓に今朝しるのく梅見哉　漂林

汲み軒に梅あふ木戸や梅の香　得甚

人通り志げき門に梅の月　松巣

宮が以身にいでて出ぬり梅句ふ　久彦

崩れ家の塀の隙や梅の花　千秋

咲くのかた下駄の門や梅の花　四明

立ち寄れば袖に梅の名残哉　梅庵

柳

古庭の柳と見ゆる日和哉　河守

日ざし見え晴れに黒き柳かな　両柾

吉野にも見る松の柳かな　小女 蒲馬

長閑な花に柳の戦かな　衣女

用ことく歩行も動く柳かな　陶里

氷波の足ゆるみたる柳かな　呉柳

塀合の櫓ゆかしき柳かな　基語

さかしくもいし烏日木（ヌルテ）の側の柳かな　ちる紀

ちらし萱の眼なき屋根や春柳　若柾

かよらし歩行手紀二階の柳かな　麻吏

青月の加みて見ら紀柳かな　少女　甚考

月の出や沖一むらの柳かな　津以

由きやん宵月のひらつる柳かな　梅國

悪の僕従ぞ倚ゝ柳かな　松什

屋根ふ紀も屋根てえふる柳かな　雲山

籠鶏の首のけてある柳かな　孝序

春植物

内庭や棲擇ふむ岸　儀子行

よ明るも見膝手山すし薮椿　一雅

海棠の潮よ持もちぬ出し来　巣松

乙道も瀧の上なり藤の花　五嶋

草摘や仕舞残しも月の際　素岐

眼に飽てのさや探るほやおや蕨　狐沐

猫の子抱おけ里から蕨の那　雪窓

大森や一風静なる木の芽とく　有月

来る日は當てなき木のめ哉　芙錦

枸杞摘や雉子なく家の外に　千年

蔵しかと見えも花咲蒿　哉　半乳

先へ来て雀の雛に桃の花　东洋

何やらん小刀で出し梅椿の雨　杜年

菜の花の夕かけ帰る一ト柳　哉　多代女

髪付けし句ひ少なしや藤の花　尚室

春雨

雉も居る嬉し春かな　素樸

木の枝に鳥帰り春かな　蒲谷

花なしと斎藤に足るや春の雨　二峰

春雨や梅柳にも隔なし　庭竹

春雨や宮の進で出来し子ら嗚る　宣年

拗なから記小篠庵摘まり春の雨　梅考

見付なしで船荷出しなり春の雨　木公

春風

人の住ぬ家まで吹て春の風　桃蝶

春の風碧海白帆の匂ひらの雨　一岑

霞

霞より追てる文まる鳥　東白然

つひ捨る霞で見るや田のし堀　素様

二ッ子對華表へ出て霞哉　両木

出代

出代の立つものほまなる日雲　東生丈

出代の送入れなりや様子口　不老

鶯

飛井戸の何のへ松てちらちなる　庭勝ひる付

鶯の声を聞すして此菴一の冊　梅尾

かく此元年に老の身の毎日之に綴くしも事

鶯の此を綴ても菴一の冊　識阿

留る声ひ鶯鳴峰に発　东月海

宿付事ひく鶯乃声音　越南濤

鶯の此く鳴も留る居　越夕山

鶯鳴法連て聴ける柳一の札　梅宗

囀一

代移る事と無ても囀る　厂　春居

六ツ四ツや門田の唐の前ま汲　东洋

吸付て多く菜籾消り囀る　厂　呉柳

乙鳥

山ふ隠を背谷の一戸移り乙鳥　越壽南

渡杭に四方見ゑ揺る乙鳥　越卦雄

便船を待留眼をつく燕　东素楳

雲雀

鉄風の出はまたしや夕雲雀　布人
見付る子大背打や揚雲雀　湖山
小松まつ小松のくまや啼雲雀　犬梅

蛙

笹の葉に宿る子ともまかる浮蛙　春庭
見ゑみまも志らと見ゆる蛙哉　孝序
年々ともに象紙帰るに鳴蛙　陶里
下駄の音紙ぬけて静まる蛙　拘去

足音に遁りしくる啼蛙　如梁
井の蛙つまだしらずて浮まかり　徐全

動物

谷へ落を彩や小山を越る雉子　抱儀
窓なりし一ツ立りし紙の蝶　管卿
蜂飛や燻ぶ絣申る蜂小隠　方桂
何となく物出さり猫の恋　峯峨

混題

和琴女

長閑さよ手枕きるや山の上　麦圭

陽炎や茶見さまた土手壇の中て

新らしい道流るゝや春の水　二晶

日上紙道て忘るゝ春日の郷　涼谷

此舟に来て春めぬ彼岸かな一の曲　福水

掃よせ堂てさむる球る雪　雉嶺

雪とけや春芽吹ける舟の肩　英里

打くして畑すかしや山一ツ　紫巣

精進の三日嫌ひきや海苔の味　虚白

瘦犬の鈎魚咥るや春の月　芬舟

花　櫻

櫻咲く葉の陰々や生けの房　梅之

こり合うて一倍霧む櫻哉　利女

色りし緑るもうや散をりる　比古

毛付つ茶屋に来て出る飯櫻　其宇

山の色見て峰る木のし一下木並　京亭

春ふかひに何をつくる花に香　怒白

ますけ出芦守つゞく花の陰　剣道

櫻折るなおかへ人の痛しさ　孤来

芝居見て花の車に往つれり　柳玉

旅しても咲き花の小家哉　泥嵐

咲からし里は奥深くなる櫻哉　素分

花見連脉乞しも小半時　夏木女

ゆふかさきて手折る子る櫻一の朝　後白

花捨て堪忍つよき男哉　孤来

義叢え花に集る鳥の群　斗米

ひと年をと出かけきちる櫻哉　嘗笠

二月中りやまうけん上野て御山ゟ
やんことなき御法会の行はるゝ時
餘所人もなつかしみ居りし事

花りなまもしやの法の庭　亭郎

かゝる御時に集り会ふ事
半生一期といへる　孝一翁

春風や桃も櫻も同し法　孤来

今日は御結願の日なれはとて頓写の
諸侯僕さへ山寺要文せ紀まで
足申る寺は山一切をてらしける大悲の
森羅万象梵音あけて読経しける
乙鳥の飛かふさへ有りかたの宿り為て

青柳の昔しなからぬ志賀へ来　大梅

餘興

切風折杉紙扱て何となり来　素樸
掃除雑子の手紀一雲御　孤米
空いよかけ落るうち日影延て　阜郎
ゝりを何やすく涼しかきくる　月海
ちよす月とふす之唄りの臺要　味
崗深くしとまぬ胡麻のかわらし　樸

雨ニ彼よ出る彼岸の是非る　海
七里ハ志かり猿背ニ寸　舟
四手をもてきるやしとるやの嫁なる　楳
笑ふ中一つら涓ほつち剃　米
咲花の之まゝさ志ての一包り　舟
鞭ふ足せよ急ら紀行蝶　海
霄のうち雨ふるかさ志きて居　米
あくまる棕櫚の藪まろき哉く　楳

むさゝびも髭の海老の住処　海
日和侍りハ俵まき森　舟
西ともかし足すかほまる蔵嵯峨　楳
苗代あまる馬の瓜紀海　米
二
肩癖のけありと直る二日灸　舟
すくぬきも結ゝ以ら然生　海
うけに安い中を常住書かける　米
むさし野寺々て汚す麦の野　楳

百萬代まても護する生涯り　海
大君の松のむかしハ風　打　郡
龍しるに御宝玉ハ打まそ田ならし　様
於て出しねと輝きて　造　末
瀬ととえハへても出世の願をかけ　郡
神より組の限くぬ要合　海
三日月の五つ森に引く屋　末
衆ニうつ一施てきに續く熱　猶　様

露霜ゆり　浩竜とも　踰す深　海
具足樋ととき　寵とりす　游　郡
婦すしくとも　閨　糖ニ霧に燻る梢の色　様
すへり　龍ニ色　藤の胴　実　末
三方に必家ととまく　老乃山　郡
陽に告り音る　東風の吹ため　海

白壁の老も別るゝ乙鳥哉　卓郎

縫目ゆかしと紀雲の志らぬ寺　来

藤棚の竹も実直に末結ひて　海

三里二百結ひかねの直に安数　郎

峰風ふきこぬやら月の晴まる跡　米

家つゝきかゝる路次の家中　海

ウ

黒漆にみゆるやうな姫とても　郎

ます掌つて唄のちやる傍輩か　米

手代は床ちか世話をも隣へ出　海

浮つき一以紀はなけるタ三　郎

勝の出るまてまうし百ヶ所　米

長いしし能の誇る蝉話　海

月見出とあらく涼に川内る　郎

鳴突道に出る浮世より紀　米

彼岸寺仏燈ひとつ手向なく　海
二日月や似合名残又やく　示
咲ともしらずすゞみ行る梅やら　米
山の端つゞきに鳴る音ぞ何　海
回りくのな似の小旅の名残なく　示
西風に回りきと晴きらぬ雲　米
売尻の流る油と気やし利　海
帳場汁入付る燭臺　示

名代にいふ妙元の噂ひ引　米
ことは云まで母に甚侍　海
ひ後しと痕くゑもりの建合　示
嵐迎し堂楠のよしかし　米
歩の寒さて山底も夢仕舞　海
橋の多ゆゑ木場不便利　示
提灯の暈のといへ月出ぬ　米
前の松より西瓜むしと咲　海

名ウ
十四手紙を綴しの字ある　揉　郎
ひえきやる出る杯　屋　味
水ゞ絹杖に帆掻ほとよつんと伸ます　海
恨りけるうち囲ひわさへる　郎
降やうなミゝミ一白武　墨　味
とり水ゞよりな紀おきら絶の善　海

始まらぬ盛ゑ汁彼岸橋哉　孤米
嘯見ゆる人のわきつ紀　月海
蜊汁沖の景色出染めて　卓郎
紀も添出すとて庭に桐書　不老
月の名しと穿立ち延ひ　大梅
秋海棠の咲くゑつく刺　呉柳

蚯蚓峠麻呂　好子麻呂かの　東洋
賊りそちかつきい雷　隠　風五
下戸ちゝり寄てよ戸を塞ぎし　二蹄
洪水おふれ　浸漏　峠　李彦
為とてつけ重衡の琵琶の埃まつけ　蒲萬
傾しきる手紙へむき檀　脳　菫蔵
墨雲移る月の暑さ　豆　返り　素樸
錦るを　煙草の匂ふ影下　笨舟

生しつ命ある鯖の鰯ともつるしく　杏陸
寺乃七枚をも稲ふ　謙　中　桃仙
内證へ書いろ花の池查志ぞり　海
ほらしくむ　や乃津　庵　米
婦らしく坐つ竹のる妻の日牛　老
秋案ろけてり　様乃本い　道　郎
似ら紋透しそ　家へ助らし　豆　柳
飲やうすそと要紙始ら添　梅

付合ハ精ル粘ひの一座となり　五

小屋堀の菊の時　暑　洋

胡粉燈木寄て桃ともとも紛　府

手紙封出ても採摘ハ分と　峰

咲まゝを活て志のまゝに　峨

髭ハ咲く以て帰以やハ添　馬

新葉青よしんを活きよしん月　舟

宿る宵のやんと雲龍　樣

鶏単の猪一を以よの乗り出し　仙

諸次の麺のりの肴以やりひ思ひ　海

近き秋添露前の雲夫手紙認る　木

活よ咲てかきら麺汐　时　庵

船ゟ寄添仕かけよ花の根を卿し　卯

咲ら咲角に旭以起きら紀　柳

發句秋之部

初秋

秋立と見ゆるや白露の始まり拶　一門

魚の血を砂も紅葉す白露の秋　千庭

長途混て秋の立ける葭の郷　芦舟

七夕

星合や張絃しめる日の筆　蒲馬

耕も知り祭とめども見え天の川　一航

白糸にかゝる見えぬ杉の葉　山厚

盆

嵐尾花や咲野に市人打かかり　一肖

出す紙に一ぬかりてハ盆用意　雉啄

出来合をすゝめられけり盆の月　瑟巣

明ばほどにいまぞの中や魂祭　大年

送火や秋哀を以てまづ松の風　卦鵝

踊

踊見や馬に飼葉もほしからず　よし香

ふけ行ば橋あるかたへ踊哉　別有

花火

よのまゝに散ばかり見えける花火哉　卦鵝

むらさきに井のうへ見ゆる花火哉　風五

秋風

秋風や茶のさきかきく妻の紀　月海

船棹ハうらかれ行や秋の風　禾菜

月

堀り人仮家もや三日の月　暁子

月やらはほとや岩間の松の枝から　琴路

営醒しる添ふ畠の月見哉　蒼虬

稚子の悼ぬ痛つくよ秋の月　暉雀

木辞つく川霧の見えて月明哉　山蝶

名月や無つてほのく柳の葉　烏津

石燈籠つけて小庵の月見哉　字郎

名月や古木の廻る池の井　素樸

さゝやうよ更り月の宵　不老

篠のら先お知りけり十三　秋大梅

稲妻

稲妻や旅ともうすはほのかり　静為

稲妻や薄の露にもひかり　華咲

秋雨

秋雨や燈り灰込盡とゝ語　周三

秋雨や四五丁先は日の照らす　呉柳

稲刈

山の香はもんむと来るや秋の風　卓郎

鴈

あさ穂にも出て鴈を秋のはじめ　阿峯

並びりほどくも見る鴈哉　真中

二三本たつ松風芝一の郷　如雪

揚るき鴈も翅芝や垣のうち　沙路

稗刈て雁の餌あるもあはれ哉　卓堂

此山の雁よき休み所は一の郷　芥舟

弱風や雲に手紙切る雁から　素産

風よりもとりや鵆もある雁哉　孤米

六八瀬の雁もうつるはつけ哉　二峰

桐一葉

一葉はつきる笠につく哉　蘿樹

桐一葉落つくまでに朝の河原　汲水

蕎花

山伏の足跡出けりや蕎の花　釜谷

西風に吹まとまりて蕎の花　斐松

茸

隣年贈りの大茸雅ひけり　筧将

此茸ぞ紀の日贈りし茸ありや菊　風洛

まつ生出る報謝なり茸の花　黄山

二日いから茸を見たり大甜瓜　盲槿

長閑なる日贈りたりけり茸の花　芝古

紅葉

日に合に壱山あり紅葉一の郡　秀外

斧入まうとすすまきゝや芳紅葉　桃仙

蔓草や紅葉ものからまりて延沼　素莚

佐中さの庄屋へまつり紅葉の郡　大梅

植摘

斜影や昨日の花をさく吹寄し　宇池

持てこそ見てこそ半なり女郎花　柳村

蟷螂や菊に縋て斧揮る　東洋

高しける薄も月をまねき哉　鴫坡

鴈

朝風や小田に見付し一ツの鴈　素樸

すさおろしふく雲の行衛や渡る鴈　姫嶽

蜻蛉

飯時や乙啼に出る蜻蛉つる　猶来

寄る寄る樣娘の足留る蜻蛉哉　斗米

鹿

鹿の音につれて走るや山の雲　桃仙

身にしみて立荒にきく鹿哉　猶来

鶺鴒

鶺鴒の尾を濡や喋りけり　西后

芦の穂に伸上りて見る鳥の郷　呉柳

蟷螂やちからなりて水の上　大梅

混題

草庵に集る蟻の幽しこの那　李席

浅き時秋つきなり嵐して　紅西

猿さわぐ僧のよく揚る九月哉　静啄

芋洗ふ音とするなり霜の中　小圃

嵐とは梢よと経し砧の那　卓郎

俳諧秋之部

蕎麦や瓶流に見えぬ淡の月　大梅

猿藤の猫よ嘘く逃秋　孤米

驛概成あら成へ撰(エリ)分て、

剽て庭の餅猿包よ集ぬ　梅

てりしと風の聲り付俤哉　八

墨気見え筆よ梅み松　穀米

紅葉の掃除もしまふ長廊下　梅

山よりさきに雪の降こむ　米

樫箱の錠に痕なき摘　棋

俤を筆に焼く鉄釘の錆　牙

西窓へ香と茶渦のすゑをなし　梅

数ぞすげたる芋の柳を結　米

霧雨降丁夜に月の徐々と姥ぐる　梅

灘の波底吹起る秋風　米

名ウ

素人に買まくらまする立宮帝　米

一ト掃をして鱒の一段　梅

小隣家の抱澤山な鞦仕事　、

寂早御ゐちも白明れ中　米

昆の芸穂ゐ立ち成りすまし　、

摘ほどに蕨のまし纏し　梅

叮嚀に答へも出来し秋の客　東洋

展ぶ尾花のひらひらと咲　大梅

船宿の屋根の上も稲干て　洋

月のさゝけに出切る路を紡　梅

一日限の云譯くと紀屋状　洋

尾振ゐる家鴨拙なく　梅

ウ

笹の葉のさらさら雪に流れ行し　洋

まきえん出しに蹄かし掲る昇　梅

かいかねて筏から守り取出るを　洋

やまり丹波と京詞ぞなり　梅

糸車賦筆乃付しにさらり　洋

薪に売るゝ来てさ榛の木　梅

又明る塔の九輪に消て字　洋

汁の実取に取く鮭小屋　梅

暑さにも遠き近ぬ角力の咲らく　洋

豆腐桟敷売られて出でし　梅

小半時摺餅おくれて暮雲　洋

主斧の音も霧む寂裏　梅

二
背代の蝶々ほ縄絨引張る　丶

湯着縫るしつらへて一と種尻　洋

紫い田識是種町の右籠　梅

二重さへやうる桁る杵木　洋

仕出しなから着て帰るにち結ぶぬ　梅

入らぬ物云ふ事揉める振志く　洋

自へきぬく蠶堂の勝る筆に触り　梅

稲の摺きて忘れ山のうちより　洋

水くみ寸に舵し草買てくる　梅

芹云ふしくとや宿桐の墓　洋

長月を好きたりのなくて用をかへ　梅

相させ二十にと筆のゝ宵张るとする　洋

儀来称那户をほんまる上り口　梅
出用見露水門の樹合　洋
糊骨めうぐ犬を濡追ひまし　梅
まみなぐのら股引きもちく　洋
何の花うそけハ上野も花盛り　梅
まつり浮てまける春雨　洋

青屋

宝豆の匂ひちらさる枯ろ那
様未結月の穀おしるにもに　大梅
万鴨時泻る岨つゝ冴立て　屋
名代斗り桜ふ寄合　梅
選筆より以数を甜屋の岩かし　屋
突出に捲よ諸る陰　梅

風邪引し後も底冷のする夜なり　原
隣まては伊勢より帰る文　梅
村はつれ菊は霜にもかれすして　雁
こゝやしこ枝の青み増す山　梅
汗入れて籠まて伊勢参りの善　雁
三か所神ら寺家も留守なり　梅
質屋の二ツ並へし茶事の上　雁
筆跡るの女の好む恩　梅

聴こえける山猫秋月にさらしけむ　雁
よろよろつ浜辺に通ひ養父入　梅
遠慮四五日雨の筆にまたく　雁
帰る旅中に雉子の鳴く声　梅
髭の白くも繁くなる来風子　丶
かくれて浮ら蓮の浮のつく　雁
月出ても汐先さへ見えす合点　梅
桃まきの中に曲実の下葉　原

川も星飛日和のうちに越つもり　梅

さらさらと拂ふ御山に吹キ　雀

活植や柾の續く赤坂　梅

乾く熱田なら汲門を紀　雀

元日も星の照りの中花の雲　梅

ここの餅ら襟にいや削　雀

切角ながら竿にも文飛て　梅

橋かゝる沖の鳥居の程ち　雀

名ウ
水臭ひ料理なれ月の切割こ、

ゆう純連なるも鴨に数志やも　梅

暖簾下ス足駄ふ雪後の拍節、

燕の巣かゝる梅の木枝も　雀

煤からも集る鐘がとりまき、

縫針習ふ窓の奥まり　梅

んとひぬきをいたゐを服ふく座ざせき
なり父ちゝかゝの家をいつしは後のちとく
はまえたる甲田ふ甲いふ屋きたは
ならひを得ん若ごいたる家を今後後姫
くるれと恥そこむまでひとちてとし
ことはやめさせまてより私の事称れ

國學院大學図書館
第6480
受入 昭和39.3.14

唐にも博士といひ大臣ある大宰
手本色迄流も時々風俗の賤し
からず事を悪しといふもの多けれど
し今此冊子を見る人必変流行の
作も盛るまてもなしかく深く案
きしとて其為人の為に何事にもあき
此人と長く交りて其志を羽ことを

四季共に俳諧のよき友なり徐や餅好
の酒好子酒好の者も好くと於家
此みちの媒ともなり其子を一生終日
とるも妙也

隠亭
封雅

水戸 大田 文金堂

[illegible]